

新たな風を読み！ ～花産業の潮目が変わる今こそチャンス～

岐阜県立国際園芸アカデミー

上田 善弘

今回の花葉サマーセミナーは、昨年サマーセミナーの開催が見送られたので、2年ごしの開催となったセミナーでした。本年6月に国で念願の花き振興法が制定され、花業界にとって大きな節目となることから、テーマを「新たな風を読み！～花産業の潮目が変わる今こそチャンス～」と題し開催されました。昨今の狭い都市における特殊空間緑化ブームを受け、壁面緑化について3課題、新たな育種戦略について1課題、鉢物生産者によるパネルディスカッション1課題、野菜苗生産について1課題、花き振興法について1課題でした。

9月6日(土)
オープニング挨拶

花葉会会長

千葉大学大学院園芸学研究所

教授 三吉 一光

多忙ななか遠方からご参加いただいた出席者へのお礼を述べるとともに、昨年のセミナー開催を見送ったいきさつ、花き振興法の制定、今回のセミナー開催、テーマの選択の趣旨が説明されました。



三吉 一光会長の挨拶

時代の流れを読んだ育種戦略

岐阜大学応用生物科学部

教授 福井 博一

育種を進める際に、今後どのようなものが流行とな

るのか、どんなものが売れるのか時代の流れを先取りして育種目標を立てなければなりません。講師の福井先生には、花を購入する人たちのマーケティングをしっかりと行い花の育種を進めていかなければならないことを提言いただきました。なかなか、育種を行うものが整理できなかったところを花市場の変遷から始め、異業種の食品業界、自動車業界を事例とし、また、先生が実践されている育種を例にとり分かりやすく解析していただきました。参加者の多くが目を開かされた内容で、セミナー後のアンケートでも「実務的に役立つ、新鮮だった」という声がありました。

まず、マーケティングの志向理論から、プロダクト志向→販売志向→顧客志向へという変化があることが紹介されました。プロダクト志向では、生産サイドの価値判断で商品生産が行われ、消費が拡大している時期には作り手の技や作り込んだ商品が高く評価されると売り手市場ですが、消費が減退し始め供給過剰になると活発な営業活動で販売を進めようとする販売志向に変化します。しかし、その営業努力にも限界が見え始め、市場が成熟すると、顧客のニーズを把握して製品生産戦略を立てて営業する顧客志向が生まれ始めるということです。

食品産業界や自動車業界を例にあげ、他業界では顧客の動向を的確に把握した商品開発戦略のもとに商品生産が行われています。それに対し、花き業界では未だにプロダクト志向や販売志向にとどまった生産が続けられており、消費者ニーズの把握方法すら見出されていないと厳しい批判をいただきました。そのニーズを把握する根拠として、各年代別の志向性を示していただきました。

その志向性は子供の頃の体験記憶に基づいており、2000年頃から現在に続く園芸店やホームセンターでの野菜苗ブームも団塊の世代とその後の50～60歳代の男性が子供の頃に畑仕事を手伝われた体験記憶に由来します。それに対し、40歳代の男性は10年後に家庭菜園を始めるだろうかという疑問が出てきます。40歳代は子供の頃(10歳代)にはマンショ

ンに暮らし、インバーダーゲームやインテリアグリーンが流行した時代なので、40歳代をインテリア世代ととらえています。

これらの40歳代の特に子育てが一段落をした女性をターゲットとしたインテリア商品の開発の一つとして、福井教授が進めてこられた観葉植物の開発が紹介されました。耐陰性が強く、室内の観葉植物として人気の高いスパティフィラムをテーブルの上で観賞するのに適した小型品種として改良されました。その手法として、コルヒチンという薬品を用い植物体を四倍体化されました。新たな品種「フェアリーウィング」は草姿がコンパクトで葉色が濃く、葉が丸みをおびる特徴があり、岐阜大学初の登録品種として承認されました。この品種は2012年にオランダで開催されたフロリアードにて金賞を、国内のジャパンフラワーセレクション2012で「ブリーディング特別賞」を受賞しています。現在、40歳代女性をターゲットとした販売戦略が進められています。続いて、30歳代をターゲットとした商品開発として進められるヒビスカス属の四倍体品種の育成について紹介されました。

生産者が経営の安定化を図るため、生産者自らが育種を行うことが叫ばれて久しいが、今回の講演にあるように顧客のマーケティングを考えた育種が今後の花き産業に如何に重要かを考えさせられた内容のある講演でした。



福井 博一氏

多様化する壁面緑化～そのシステムを総括する～ 大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 教授 山田 宏之

花葉セミナーの講師としては二度目ですが、都市気象、都市緑化技術の専門家、都市における特殊空間緑化による気象緩和効果に関する研究の第一人者であることから山田先生に壁面緑化を総括していただきま

した。全国で展開されている多くの事例を実際の写真で紹介し、評価されました。

壁面緑化技術は、この10年間に急速に発展してきており、従来型のつる植物を用いた登はん工法とは全く異なる技術が使われるようになってきています。それらの工法を分類整理してご紹介いただきました。工法が日々進化しており、分類できない中間型や全く異なる発想で施工されるものもあり、それらは長期実績に乏しく、永続性という観点からは十分な検証が行われていないとのことでした。

ナツツタやヘデラを用いた古典的な壁面緑化から始まり、補助材付き登はん型、(補助材付き)下垂型、基盤取り付け型(基盤造成型)まで、国内を中心にした豊富な事例を写真で紹介され、それらの施工法を解説するとともに評価をしていただきました。直接登はん型では植物の生育範囲のコントロールが難しく、都市緑化の工法としては問題が多いということでした。そのような問題を解決する方法として補助材付き登はん型があり、古くからの施工実績があります。ヘデラ・カナリエンシスを用いた補助材付き下垂型は、施工実績もあり、長期安定性のある優れた施工方法です。現在、最も施工面積が増大しているのが、基盤造成型の壁面緑化で、様々な工法が開発されてきています。立体花壇の技術を応用した軽量安価な工法が増えてきていますが、建築資材としての耐性、防火性が十分に確認されておらず、課題が多く残っています。

一概に壁面緑化といってもいろいろな工法があり、それぞれの利点や問題点があることを知ることができた講演でした。



山田 宏之氏

オーソリティが語る壁面緑化のトレンド

有限会社緑花技研

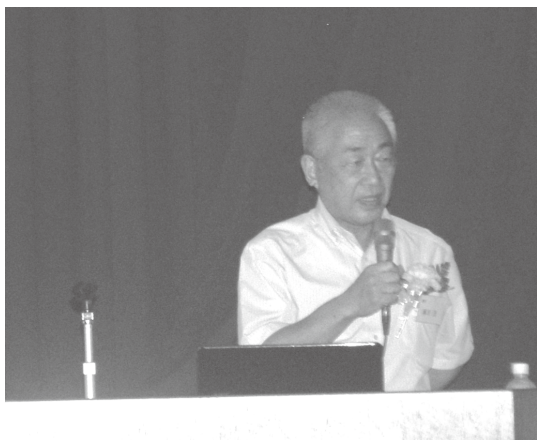
代表取締役 藤田 茂

前の山田先生の講演で壁面緑化を工法という視点から総括していただき、本講演では、用いる植物側に視点をおき、具体的な手法をより詳しく解説していただきました。講師の藤田茂氏は民間企業にて長年に渡り、都市緑化、特に屋上緑化・壁面緑化の調査・設計・施工を数多く手がけられてきておられる第一人者です。

壁面緑化において、つる性植物の壁面への付着方法の違い、結束資材への植物器官の巻き方、つる性でない一般的な植物の壁面への利用について、緑化形態の違い（直接登はん、間接登はん、下垂、壁前植栽、壁面基盤）への相性、用いる登はん補助資材が示されました。さらには植物形態別にみた各種地盤・基盤への相性、各種緑化基盤への灌水方式の適合性等について解説されました。また、壁面緑化に用いる緑化植物ごと（付着盤型、付着根型、巻きひげ型、下垂型、一般的多年草など）の緑化への植物特性が示されました。

続いて、壁面緑化現場における光環境について、必要な光の強さ、持続時間が示され、屋外と屋内での光環境の特徴について示されました。植物により16時間以上の光照射では生育が悪くなるもの（落葉高木）があるが、多くの観葉植物や苗木では長時間の光照射でも問題がないとのことでした。また、壁面の向き（東西南北）からみた時の季節による太陽光の相対比が示されました。

これまでの経験に基づいた藤田氏ならではの詳細な壁面緑化についての講演で、これから壁面緑化を進めていくうえでの貴重な情報を得ることができました。



藤田 茂氏

猛暑の館林でシクラメン品質ナンバーワンを目指して ～第二世代によるユニークな活動～

邑楽郡館林シクラメン生産者 峯崎 宏之・折原 孝昌・野本 寿久・小久保 智広・石川 英司

群馬県館林といえば、全国でも最も夏が暑い地域として有名です。その館林で全国一のシクラメンの生産がなされています。夏の暑さに弱いシクラメンがなぜ猛暑の地で最高のもになるのか、その謎にせまるのがこのテーマの討論会です。演者は館林地域の第2・3世代生産者5名です。それぞれの生産者に生産の概要とその取り組みについて語っていただき、長岡・渡辺両幹事から演者に質問を投げかけ、高品質シクラメンの生産方法を解明していただきました。

館林地域のシクラメン生産は約70年前に始まる古い歴史がありますが、夏季の高温により高品質なものはなかなか作れませんでした。しかし、2000年ごろから農業普及所の指導のもと、植物体の「栄養診断」という新たな技術が導入され、この技術を利用することにより高品質なシクラメンを生産できるようになりました。週に一度、植物体の肥料成分を測定し、その値を参考に施肥管理を行うというものです。このことにより、従来よりもきめ細かく正確な施肥管理ができるようになり、暑い夏にも負けない株を生育させることができ、品質を向上させることができたのです。ちょうどこの技術が導入された頃に、第2世代、第3世代が親を継承、就農し始め、一気に品質の向上がなされていきます。これらの第2・3世代はグループを形成することなく、仲良くなりお互い情報交換を行い、個々の栽培、経営を高めてきたのです。

この若手後継者のうちの5名がそれぞれの経験と経営、栽培の実際を語ってくれました。なかには脱サラをし、現在はコンクールで賞を取るほどの高品質のものを生産できるまでになっている生産者もいました。

このような次代を背負っている頼もしい生産者による、パネルディスカッション形式による議論は聴講していただいた、特に生産者にとっては好評でした。



館林シクラメン生産者



伊藤 孝巳氏

9月7日（日）

今、屋内に広がる壁面の花とみどり

株式会社伊藤商事

代表取締役 伊藤 孝巳

ハンギングバスケットを始め、立体花壇のシステムを作り上げ普及されてきた先駆者、伊藤孝巳氏に、これまでの経験から始まり、室内緑化を中心とした壁面緑化の工法、ご自身開発のシステムについて解説していただきました。

これまで開発されてきた立体花壇のシステムが大阪の国際的な花博（1990年）、中国雲南省昆明の花博（1999年）、浜名湖花博（2004年）で披露され、話題を提供するとともに高く評価され、それが日本ハンギングバスケット協会の設立につながり、現在、日本各地に広がってきています。

現在、フランスのデザイナー、パトリック・ブラン氏が世界の問題をさらっており、彼の工法による大掛かりな壁面緑化が日本にも作られています。その他の国内外で使われている壁面緑化の工法について紹介されました。さらにご自身が最近進めておられる屋内向けのカセット式のシステムを紹介していただきました。

また、緑がもつ効用を利用したオフィス緑化を推進すべく「屋内緑化推進委員会」を立ち上げられました。最後に屋内緑化には大きなマーケットがあること、それらの利用を進める運動が今後重要であることが述べられました。

今回は、進めておられる最新のシステムによる観葉植物による壁面緑化の実物も見せていただきながらの講演で、分かりやすい内容でした。

野菜苗供給の構造改革に学ぶ

有限会社徳島シードリング

代表取締役 延谷 磨

今回初めての試みですが、花ではない野菜分野から野菜苗の生産の実際につき、千葉大学園芸学部卒（蔬菜園芸学専攻）の延谷磨氏から講演をいただきました。花苗生産は野菜苗生産に比べて遅れていることから、花産業も延谷氏の講演からもっと学ぶべきであるという考えから、このような講演をいただくことになりました。

現在、野菜の栽培面積の減少に伴い、苗の需要量は減少していますが、購入苗数は激増しており、そのうち果菜類苗推定流通量が約4億本で、接ぎ木苗の購入率が非常に増加しているとのことでした。現状の報告の後、野菜苗生産の変遷につき、1950年代から現在までの変遷を概略いただきました。1950年代に日本各地において育苗技術に優れた農家集団による育苗専業経営が始まりました。その後、栽培用ハウスの大型化に伴い連作障害が問題となり、接ぎ木苗の需要が増加し、栽培と育苗の分業化が始まりました。1980年代からはセル成型苗の導入と幼苗接ぎ木の開発と普及が進み、苗の大量流通時代に入ってゆきます。新たな野菜苗生産の取り組みとして、人工光閉鎖型育苗施設や固化培地の利用、半自動接ぎ木ロボットの導入があります。延谷氏が経営されている(有)徳島シードリングもこのような流れの中で発展してきました。新たな取り組みとして、施設稼働率を向上（育苗品目の多様化と育苗期間の短縮化）、直接定植用プラグ苗や有機栽培適合プラグ苗の開発を進めておられます。

講演を通して、先行する野菜苗生産の現状を知りたい機会となりました。



延谷 磨氏

花き振興法でどう変わる？

～その内容と活用術～

一般財団法人日本花普及センター

専務理事 西岸 芳雄

本セミナーの最後の演者として、一般財団法人日本花普及センター専務理事の西岸芳雄氏に、本年の6月20日に国会にて成立した「花きの振興に関する法律」の概要とポイントを紹介していただきました。

本法律は花き産業の長年の悲願で、議員立法にて議員の全会一致で可決、成立しました。この法律について条文にそって、目的から基本方針、振興計画などにつき解説していただき、花き業界における取り組みにつき、国産花きイノベーション推進事業、全国花育活動推進協議会による花育活動、花の国日本協議会の始動、屋内緑化推進協議会の活動の紹介がされました。

本講演により、花き振興法の具体的な内容につき、より詳しく知ることができました。まさに業界の節目として変化への推進力となる法律です。西岸氏からの「これからの花き振興を目指した民間活動に対し、行政サイドから支援を受けられる根拠ができたことになる」という説明からも法律成立の意味を確認できました。



西岸 芳雄氏

まとめ

花葉会幹事長 株式会社F A J取締役 長岡 求

最後に長岡幹事長から、これまでの花葉会が行ってきたセミナーでは革新やチャレンジなどの言葉を用いてきたことを踏まえ、「新たな風を読め・・・」と題し、現状維持の打破、時代の流れを読み新たなチャレンジに臨んでいただくことを願い、テーマ、講師を選び開催した趣旨を説明していただきました。来年の第30回の節目のセミナーへ向けて、これから取り組む意思を表明するとともに参加者へのより一層の支援・協力をお願いし締めくくっていただきました。

二年ぶりに開催したセミナーにも関わらず参加者の少なかったことと今回のセミナーでのテーマのまとまりのなさに対し聴講者から厳しいご批判をいただきました。ご参加いただいた方々、アンケートへ率直なご意見をいただいた皆さんに感謝いたします。この教訓をふまえ、来年の記念すべき第30回セミナーに向けて議論を進めることを幹事一同確認させていただきました。



長岡 求氏

◎テキスト購入希望の方は、代金2,000円（送料込）を添えて、下記へお申し込みください。

〒271-8510 松戸市松戸648

千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内

「花葉会」事務局 ☎047-308-8810

ゆうちょ銀行振替：東京 5-1334 花葉会

◎第30回花葉会セミナー
の開催予定

日時 平成27年7月18日(土)
19日(日)

会場 千葉大学園芸学部
合同講義室



伊藤商事のロビー展示